会長冥利

全日本実業団剣道連盟会長
植村裕之

毎年９月に開催される「全日本実業団剣道大会」には、全国から２０００名を超す剣士が集う壮観な大会で、日本武道の聖地である日本武道館で行われるのが、誇りの１つです（令和元年と２年は、オリンピックに向けて改修中のため他所で開催）。

私は大会の会長として、まず当日の審判をお願いしている約130名の範士を始めとする剣道の達人にご挨拶するのが通例になっています。判定の正確性を誇る審判団によって、この全国大会の質の高さが保証されていることは私達の誇りの２つ目です。

９時に太鼓の音から始まる入場式は、前年度の覇者チームを先頭に約380チームの剣士が会場を埋め尽くし興奮を覚えます。決勝戦までの約９時間は喚声と気合いと声援で戦場を思わせるような時間です。この濃密な時間を剣士と観客が共有できることが、誇りの３つ目です。

参加する企業は大企業だけでなく、中堅・中小企業に勤務する剣士も多く参加し、真剣勝負です。企業の大小に拘わらず、剣道の前では皆平等であるということを実証しているのが、誇りの４つ目です。

そしてこの大会で私が好きな時間は、戦い終えた剣士の「礼」を観る時です。中でも敗れた剣士の「礼」は、流石実業団剣士ともいうべきものです。敗れた悔しさを自ら制御しつつ、全力で戦った満足感と相手の勝利を称える尊敬の念と審判員やいつも支援してくれる会社とその応援者への感謝の念などが入り交り清々しさと感動を与えてくれます。企業で身に着けた沈着冷静な精神力が発揚される素晴らしい「礼」は、誇りの５つ目です。

私が全日本実業団剣道連盟の会長に就任したのは、私が所属する三井住友海上株式会社の剣道部の最高顧問をしていることのご縁もあります。

本社は神田駿河台にあり、そこに「百練館」と称する剣道場があります。江戸幕末の頃、神田には高名な剣道場が多くありましたが、その土地でかつ本社に併設した剣道場を有しているのは稀有の例ではないでしょうか。神田の地元の剣士や会社の取引企業所属の剣士達が毎日集う場所で、鍛錬と親睦が図れる自慢の剣道場です。

さて、連盟の会長は、全国大会の主催者としてだけではなく、連盟の事業収支を始め各種大会の運営全般の責任者としての役目が多くあります。

日本武道の伝承と剣道の普及と剣士の企業での活躍を支えるのが連盟の仕事で、そこには派手さではなく、むしろ地道に行動することが求められます。ショー化した剣道は見たくもないし、ビジネス化した剣道もあって欲しくないと考えています。剣士の溢れる闘志が、仕事に剣道に発揮されるよう支えることが望まれていると思います。

９月の全国大会だけではなく、３月には連盟主催で「全日本実業団女子・高壮年剣道大会」が行われます。120チームを超す女性企業剣士と約１０００名の高壮年剣士が参加します。生涯剣道を目指し、鍛錬に励む高壮年剣士ならびに世界中の女性剣士の模範となるよう切磋琢磨している女性剣士が一堂に会し、これも約９時間かけて夫々覇を競います。

高壮年剣士は先ず一本を目指しますが、一方で剣道を楽しみ愛でている雰囲気が会場内に醸し出されています。

女性剣士も先ず一本を目指しますが、一方で剣道によって心が解き放たれ、縦横無尽に心身共に解放されている雰囲気が会場内に醸し出されています。

このような雰囲気に９時間も浸れる会長職に誇りと喜びを感じます。

この誇りと喜びを大切にしつつ会長としての役割を全力で全うしたいと願ってます。